



Title	Prelude と Osaka Literary Review
Author(s)	藤田, 実
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25580">https://doi.org/10.18910/25580</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Prelude と Osaka Literary Review

藤 田 実

大阪市の南部の阿倍野区に旧制大阪高等学校があった。第2次大戦後に新しい学制が施行されて新制大学が発足すると、これが大阪大学教養部の南校といわれるものになった。昭和29年の春に、この南校での教養課程を終えて、阪急沿線の石橋で降りる豊中キャンパスの文学部に進学したとき、英文科の授業科目には、たしか竹友藻風教授の *Wordsworth: The Prelude* 演習がふくまれていたはずである。ただ、この演習は一度も行われなかった。竹友先生は、われわれ新生の前には一度も姿をあらわされぬまま、その年の10月に逝かれたのである。肝腎の主任教授の顔も知らぬままでうろろしているわれわれを指導されたのが、当時、助教授でおられた矢本貞幹先生であったが、どうした加減か、当のこの矢本先生が辞任されるとの噂が流れてきた。これは大変と、同級の I 君や H 君とともに、当時は大阪市の南東部に住んでおられた矢本先生のお宅にうかがって、辞意を撤回して下さいようお願いしたのであった。結局、私どものたよりない姿をあらわれんで（だろうと思う）、矢本先生はしばらく大阪大学にとどまって下さり、のちに関西学院大学に移られた。これは大阪大学の英文科学生としての、いささかとまどいをおぼえる序曲であったが、昭和20年代という戦後の激動期に育ったものとしては、これもいろいろの激動のひとつと観念して受けとめていたのであった。

矢本先生の座談の中で、ときどき先生の口から「ササヤマクン」という名前がもれてくるのが印象的であった。当時はすでにハーバード留学から戻られた頃かと思うが、この先輩にはじめてお目にかかったのは、当時、大阪大学の英文科の卒業生の有志でつくっておられた同人雑誌である *Prelude* に、昭和35年の第4号の前後から同人として参加させてもらい、例会の

ごときものに出席した時であった。この *Prelude* 第 4 号の時のメンバーには、A B C 順に言うと、秋山肇、藤井治彦、平戸喜文、上山泰、三浦常司、奥田博之、尾崎閑堂、坂本公延、笹山隆、社本時子、即席水雄、杉本竜太郎、山田玲子、山田豊の各氏に私自身が名をつらねている。大阪市内上本町六丁目近くの浪速荘（現在は浪速会館と称する堂々としたビルであるが、当時は焼け跡に建った小じんまりとした木造 2 階建てであった）が例会の会場であった。この例会での活発な討論に、私は大いに啓発された。英文学というものの世界への本格的な序曲を、あらためて私はこの *Prelude* の同人の集まりから聞くことができたのであった。

この *Prelude* 誌は昭和40年の第 8 号までに、榊田良一、松平陽子、森晴秀、斉藤俊雄、梅垣清の各氏が加わっていた。私を含めて、これら *Prelude* の比較的新しい同人は、竹友先生のあとをしばらくつがれた加藤猛夫教授や、その後をさらに受けつがれた村上至孝教授の時代の大学院の学生であった。これらの英文科の大学院の学生を主体に、あらたに英文学の研究雑誌をつくろうという気運が生まれた。*Osaka Literary Review* の第 1 号は昭和37年の春の刊行となっているが、その表紙には、すでに今日と同様に〈大阪大学大学院英文学談話会〉という文字が刷りこまれていて、英文科大学院の機関誌的な性格がはっきりあらわれているといえる。この号には斉藤俊雄、藤井治彦、渡辺孔二、藤田繁、森晴秀、梅垣清、竹内孝治、榊田良一の各氏が執筆者として並び、私もそこに加わっているが、*Prelude* の比較的新しい同人とメンバーが重なっていることがわかる。私たちの数人はすでに *Prelude* の編集の方にも首をつっこんでいたから、あらたに創刊の *Osaka Literary Review* も、*Prelude* にならって、印刷を堺にある大阪刑務所に厄介になることが自然に決まった。

*Prelude* は、*Osaka Literary Review* の最近の同人の人たちはほとんどその存在も知らないくらいであるが、この両者はある近縁関係をもっていたし、またある種の有機的関連すらあった。少なくとも *Osaka Literary Review* の創刊時のメンバーの中には、私をも含めて、そのように感じた

者がいたといえる。*Prelude*は竹友藻風先生の時代に、尾崎閑堂氏あたりの提唱で発足し、〈*Prelude*〉という誌名は、笹山隆氏の発案になるものであったように聞く。それは、創設まもない大阪大学の英文科が何もかもこれからだという意気込みを、この〈序曲<sup>プレリュード</sup>〉という名前に託した命名であったようである。だが、後から同人に加わった私などは、すでに Wordsworth の *The Prelude* についてすぐれた註釋の仕事を残された藻風先生の感化が、この〈*Prelude*〉という誌名にも深く浸透し、英文学を通して文学的感性を深めようとするわかわかしいロマンチズムの精気が、そこにみなぎっているように感じていた。しかし、大阪大学の英文科のいわば第2代目にあたる層が新しく創刊する *Osaka Literary Review* には、そういったロマンチズムへの傾斜を排して、それとは対照的に、より主知的な、より堅固な批評的姿勢を確立させてゆこうという考え方が、無意識のうちに働いていたといえよう。それが誌名にも反映して、〈*Osaka Literary Review*〉という、主情的傾向を意識的に遮断するような、乾燥した名前をえらんだのである。私自身は少なくともそう感じていた。この誌名の発案は（私の記憶にまちがいがなければ）藤井治彦氏であった。当時、彼と森晴秀氏、それに私とは、大阪市内の淀屋橋近辺の静かなコーヒー・ハウスを場所にして、I. A. Richards の *Principles of Literary Criticism* などの輪読会をしていたから、*Osaka Literary Review* の命名にも、そんなことがひとつの影響を与えていたかもしれない。

*Osaka Literary Review* の最初期の同人は、このように概してそのまま *Prelude* の同人であり、後者はやがて廃刊になるが、しばらくはこの両誌は併立し、少なくとも私自身の中では、この二つの雑誌はお互いに重複しあうよりも、お互いに相手を補足しあう存在と感じられていた。もはや第20号の記念を迎える今日、*Osaka Literary Review* の誌名から、わざわざ私が言ったような意味をせんさくして下さる御苦勞な方もおられるとも思えず、また何よりも、*Prelude* という雑誌が大阪大学の初期の英文科卒業生の手によって刊行されていたという事実すら、最近の世代の方々には知

られることがなくなっているのです、あえて、この両誌の結びつきを記してみただけである。*Osaka Literary Review* を創刊してしばらくしてから、私は九州大学に赴任することになり、福岡に住んで、*Prelude* とも *Osaka Literary Review* とも、依然として同人ではあったが、おのずから物理的距離が生まれ、もっぱら遠きにありて思うものとなっていった。四ヶ年余りで再び大阪に舞い戻ったが、この遠くにあって思うという感覚は、奇妙にも未だ消え去らないままに、この二つはそれぞれシンボリックな意味を今日もなお、私の中に残しているのである。